

^ 13
3242



13
3242

席

方小
口

其書そのしよ也あなるなる以も疑うたがひひ惑まどししんん之の也や
其書也なる以疑ひ惑しん之也

或あるりり差さおおよよすす以も結むるる方かたももああれれ也や
或り差およす以結る方もあれ也

いいめめへへままをを赤あか譜ひ危あや言ごのの事こと子こ何なにももももめめ
いめへまを赤譜危言の事子何ももめ

能よく達たつのの才さい識しとと皆みなむむ全すべくく或あるりり禱いたひひ
能達の才識と皆む全く或り禱ひ

たたもも小こああはははは今いま所ところ々々怪あや詭ま言ごのの益えき
たも小あはは今所々怪詭言の益

何なにれれ。一ひと小このの神かみ佛ぶつのの慈あま悲な二ふた小このの勤こん苦く懺ざん悔げ也や
何れ。一の小の神佛の慈悲二小の勤苦懺悔也

後述

昭和十年
七月九日
購

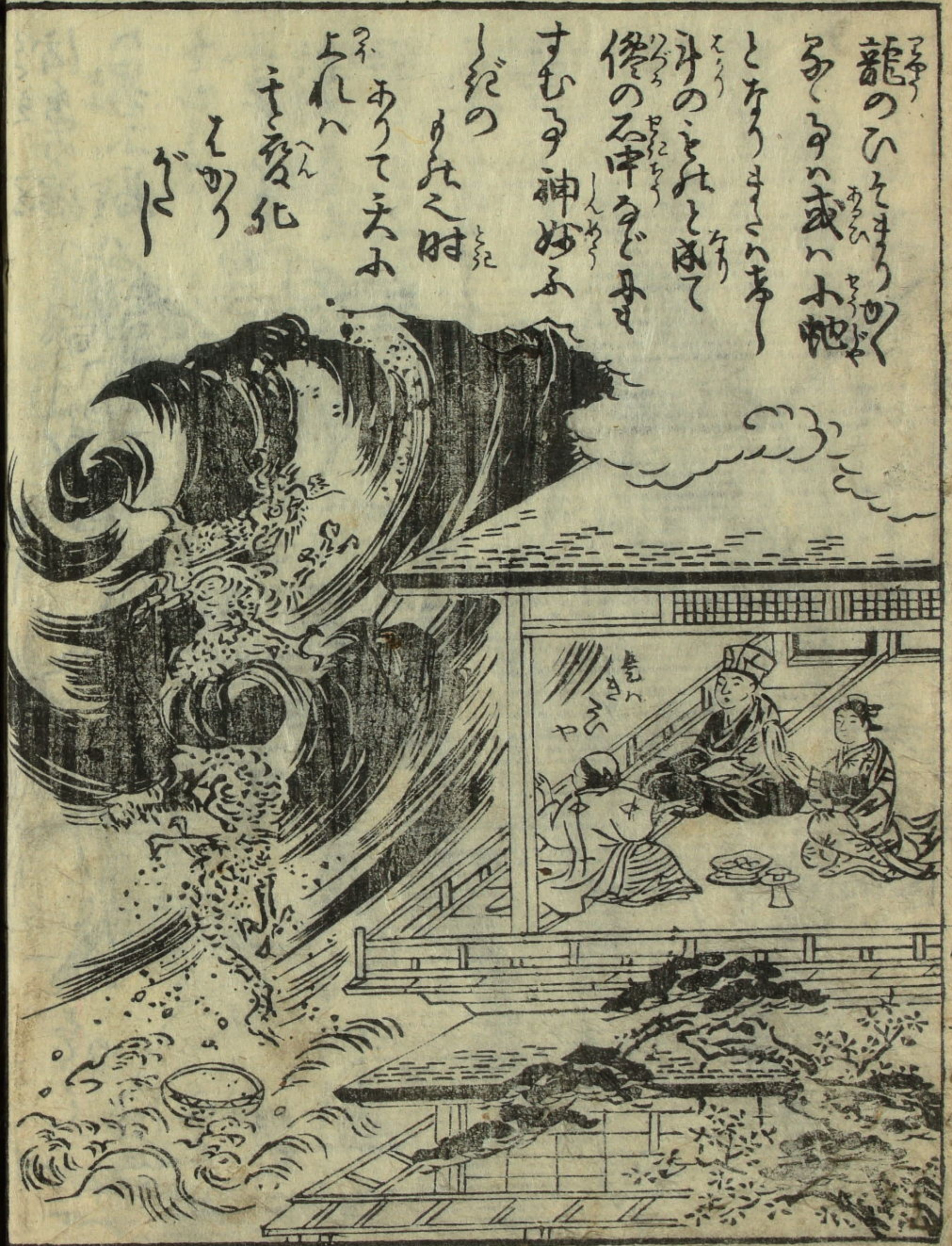
志多衆のゆめんといふはたはたせうせうすまは内ふ入く
 あんばきも今版ぢんとかてまき衆のすてお孫ありり
 て赤子平次とを奉公かこも長りの家内い中しきまじま
 りたしりし親をまき衆かかお内れりのま内がか守を
 日てもそくあぬおせいと一人もま後衆のゆめんのあ
 ま内いぶかきまじりあひけいびきき之伝もよりのま
 せくのれいしゆめりりつは月をりたさるまはすりのかりしと
 せどもまき衆はゆめんともせは衆にらも入てよ種はしれ
 あんたのふせとせどもこまで中や妹よあをを伝ひけを
 むろのち衆にこむりのあやしゆもいへもせだしがま内
 すまじつとあまのりて大せんとよてまがし衆人屋死よ
 っのたましくつたのふはたせうせうすまのせとまらり



伝多の衆
 へ鬼小馬
 をのり
 乗せたり
 追は見え
 たしつて鬼が
 人共ふか
 控ひしき
 馬にのり
 士こそ海
 鬼の
 女士
 登し

まうまはう
 下まふ

紅印



龍のひとまうのく
あつみの成り小池

とをうまきこいあ

斗のまれと成て

俵の石中をどき

すむる神妙ふ

くたの

りれ之時

あつて天ふ

よれい

千と夜化

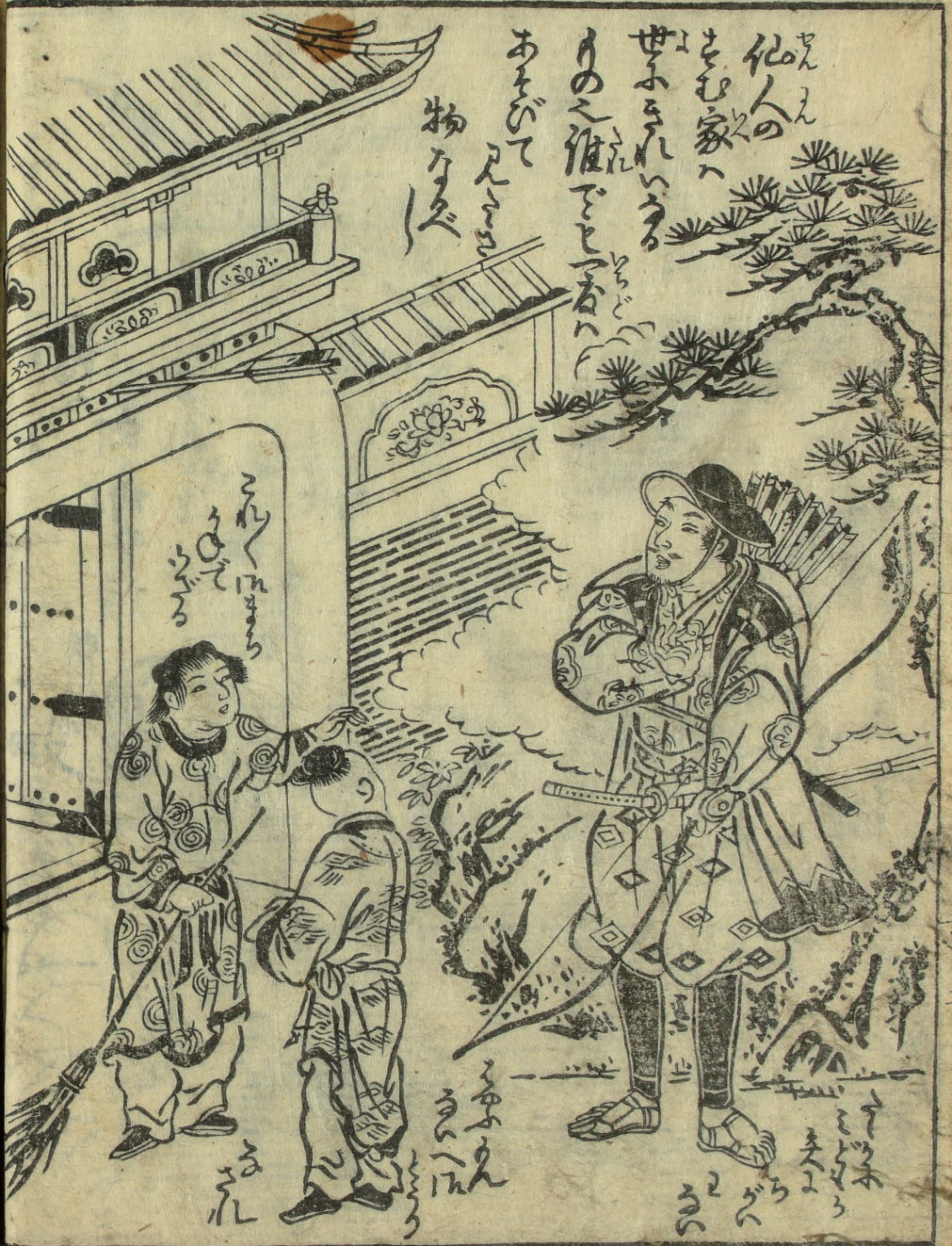
こりり

がに

母見をたあ族ともあを成かろくしむらどわ世かぐがこれ
はふ中につづれあはるの成たへふとのト世どなを
ありていすまりあは中ありて父のいさるの月
むさくちふふりま成あうおのふけと成たてびんも
成をいりま下りえとらまあしれんバ成くかこまりて
の何もの四もまうけありれ先月西英渡なる見成世の
ひん死をうたありしとさはのりやをみどりうらまや
ひん何んおほつのおまお成はうりてなみらういおよゆ成
たてま月あふれなまてそれぐ一は園おて今あよありの大
て成あはり西英渡の二世人織田との世利う余はもの成と
たかお小くさうりてまの合とてま月が月れう今事くま
まうとあうぬ見身たかおおごりたるなりま月を満ひ

天地にやうとらひといふ一補強をぬかす時がうらたつてかろ
 たちといふ際よりお一はうしうちせめてのこけいざたよ
 あらも沖のこけいざたよあらふ十日又かたつりむむらへむら
 ゆたつるとぬかすといふかたつりぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 まじつらぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 すまじつらぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 てまじつらぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 へくちがせまのぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 のまじつらぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす
 こびぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかすぬかす

生駒仙境



夫らるるの文苑にけりて老矣一謝しとてそののりたき
まじし品をけりてたがねれもさ家ありし西のきくた松枝の
ゆに笑ふ顔のま本もやなまらぬのこころもようた
らるるやふあてり

いふとさあやふ

一 款村浮田物語

全部二冊

村、色と愛と魚と音と音とあの中あのおどり拍子

美、綴と墨と男と女と分てもわらぬ海とあ
ちりあてちりあぬあのかた死とお船の又辰月

右正月二日の中、筆におり、あてに任組よのな
いりてあふあてのいりて

天地人の間一切あてり事国字分以て

博物筌

全部一冊或七冊出来

事理詳小由来年数等即時に見る書也

天地日月風雲雪霜の理を説國郡山川来
暦と記一、年々長曆并註日和降晴御武鑑
年中行事神社佛閣神秘縁起諸職諸藝流
義始末佛家十宗の起并流派公家武家学
者歌道有職僧尼隱士雅楽申樂茶道能筆
画工都和漢名誉人物妙薬妙術秘傳金石
草木器物等出所異名和漢年号年数等記

神仙れお遠

并々素名れわしつ神

対り仙人とわさ人の
まじりておのり

殿中此賭物

并々かまらぬ此素絶ハ女は互の

対り総お小指し
勇士のりつそこの

山神の復仇

古後妖の種ふりたるとはけらる種りてきれん物種もた
り成さる鬼種もあまことあつたてきりてきりて種
ありてきりて鬼種とあまごりあるじれん物種もた
わひれ身おあよおそる念中やうりあれと病めりあせん
候及の老たふたり成さる種ありて奇候ありあるんけ
きりて鬼の地隠し種とあまごりあつたてきりてきりて
由地成る人あまひたつて鬼種のあまごりあつたてきり
はくしあつたてきりあつたてきりあつたてきりあつた
りあつたてきりあつたてきりあつたてきりあつたて
東成子鳥とあつたてきりあつたてきりあつたてきり

きぬ借ぬのさかんでんふさかきそくをうれ北河原のてまき
秋に入てうめくさやえんげしきまねく身とをさうてえん
族をさみまてあつはまうをぬるをんとすのふけひのたこ
まがひいころとおの金在中ではは出てはねもきく脱
おけらうたさたあにのほ家申よねびごまかき
傷ふ一様中えんそよびをさるにそくでんあかき
とたつひもれもほのよもゆかては本捕へたあにすのぬ
つひをさまきす月をうのつて平ゆし眼にさうりなり
とそくくち空海化度の地さればきくえんごさる本捕を方
の欠きふきぬあつて格化してまきすくひのひさかき
はどあがひに深あき

祢仙の相違

これいふ世ふありのひとゆかぬぬ建てより二時代のうち
いふまきそく空強の先祖ふゆり人出のめことひつよ
ひりきりあつて王族も人地界あればをさかきひ
まきいふまきそくはねあをさかきひりよさきひのめ
死のまゆりてた令限珠もさかき棺中におあかきひ
かゆせとさるぬき永れあつてよまはひのめひりあ
かきいふまきそくあの中ふおよりぬに氏もすくえんさ
まふ材室の屍とおひくさかきむもさかき名あつてよ
のりのかきかきねき華名深あつて系極あつてよ
あつてまきかきより執持のひふさかきひのめさかき
とわねまきしあ材使使し今あつてよひりてよまき
およみて夜合よあつてひりあつてよあつてよあつて

未^こ然^{ぜん}れ得^{とく}失^{しつ}

并^な、為^な人^{ひと}のすしたの種^かも

おそれぬ酒^{さけ}の

付^つ、非^ひれよ成^なるのてあつぬ^なほ^ほびの

美^みれ^れ的^{てき}

右^こ續^{そく}れ報^{ほう}忠^{ちゆう}

并^な、沈^{ちん}魚^{ぎよ}房^{ぼう}八^{はち}義^ぎ人^{にん}も

井^いれ内^{うち}あり

付^つ、未^こ然^{ぜん}と奈^なして高^{たか}留^{りゆう}の

くれ續^{そく}の徳^{とく}

仁^{にん}術^{じゆつ}れ本^{ほん}懐^{くわい}

醫^いれ女^{にょ}をひと流^{りゆう}しつ^{しつ}のど^どの^の将^{しやう}の民^{たみ}と^とわ^わら^らん^んと
た^たけ^けら^らし^しお^おな^なぐ^ぐ仁^{にん}人^{にん}の^の心^{こころ}を^をら^らに^にて^て和^わく^くと^とも^もな^なら^らず
や^やな^なの^の心^{こころ}を^をら^らし^し勢^{せい}も^も神^{しん}醫^いも^もよ^よ中^{ちゆう}井^い義^ぎれ^れ元^{げん}祖^そ知^ち若^{じやく}衣^い
道^{だう}と^との^の心^{こころ}を^をら^らし^しよ^よ中^{ちゆう}井^い義^ぎ道^{だう}の^の中^{ちゆう}真^{しん}而^にて^て難^{なん}症^{じやう}美^み病^{びやう}
と^とす^すひ^ひあ^あま^まあ^あひ^ひら^らか^かして^{して}名^な譽^よを^をあ^あら^らせ^せた^た外^{がい}の^のか^から^らは^は
く^くじ^じの^の心^{こころ}を^をら^らし^し西^{せい}の^の心^{こころ}を^をら^らし^しの^の心^{こころ}を^をら^らし^しよ^よの^の心^{こころ}を^をら^らし^し
ら^らや^やな^なし^しに^に人^{にん}お^おく^くか^かこ^こひ^ひあ^あま^まの^の心^{こころ}を^をら^らし^した^たら^らぬ^ぬら^らし^しと^とも^も
よ^より^りて^てた^たれ^れと^とま^まて^てあ^あま^まの^の心^{こころ}を^をら^らし^した^たら^らぬ^ぬら^らし^しと^とも^も
ら^らん^んの^の心^{こころ}を^をら^らし^した^たら^らぬ^ぬら^らし^しと^とも^もよ^より^りて^てた^たれ^れと^とま^まて^てあ^あま^まの^の心^{こころ}を^をら^らし^し
わ^わら^らし^した^たら^らぬ^ぬら^らし^しと^とも^もよ^より^りて^てた^たれ^れと^とま^まて^てあ^あま^まの^の心^{こころ}を^をら^らし^し

二百八十のりきせいのをいふとあつたものもいふはるはた
うまの目もあつたといはすもあつたをいふるまのね

未然の得失

大徳のおとく成りといふ細障のさかたをたかすといふおせまで
様と云ふところのたかたりの内無十善備を秀の光徳のちや
く子母でおこしたと死ににうれぬ救世の厚み光妻のやうい
くぬ人とも別業の才徳ありて内は才徳ありて弘法
二ひれ秋夜を能く再たき免ふらばなりと死光秀も一粟
うらまふとすのみなれども救世のまじなりのしごとくぬて
びぬるなりおこさんと二徳くらひあつたに二十人なるの
てあつたといふ徳もあつたといふもあつたといふもあつた

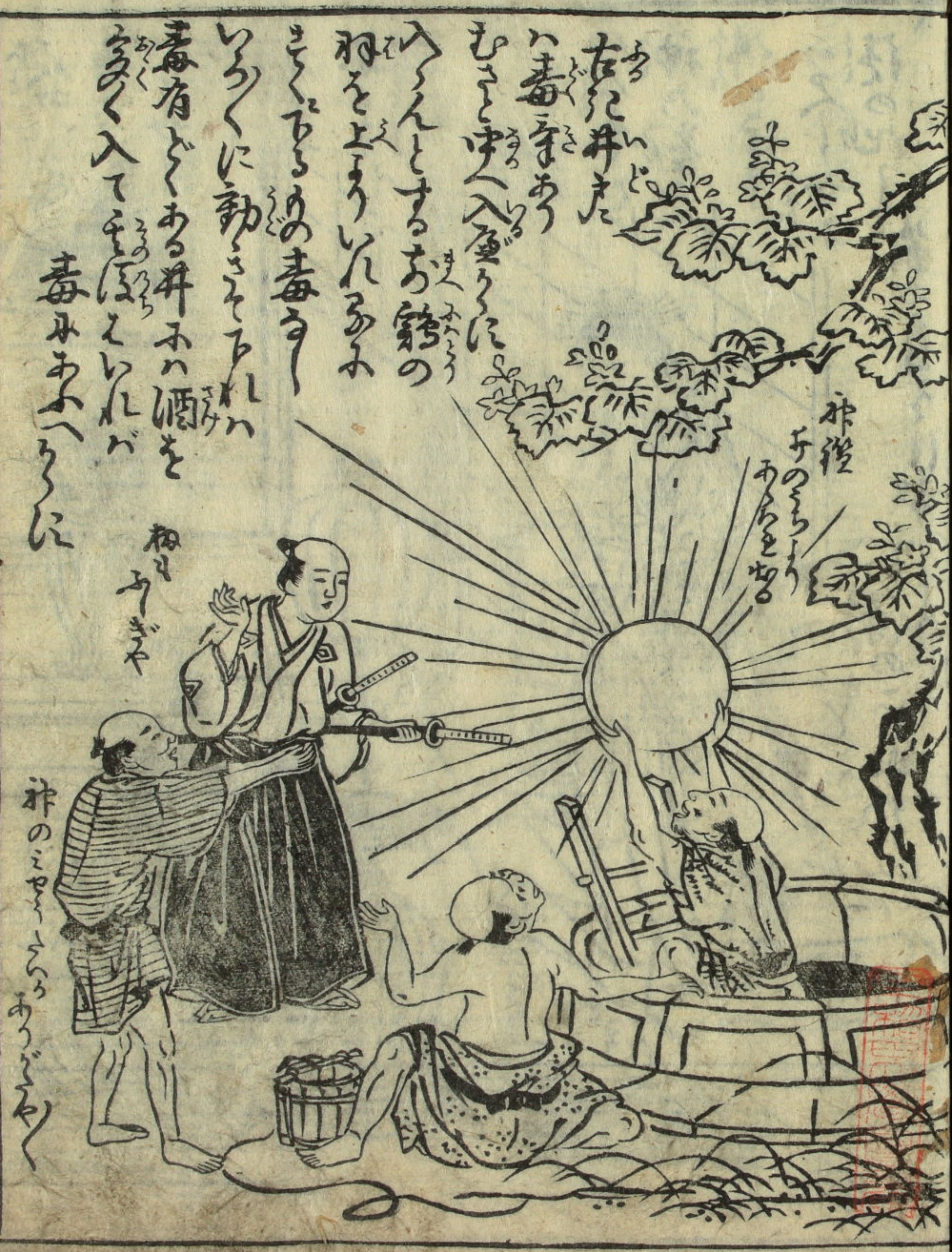
愈てあつたといふのたつといふおせまでおちのびけるあつたといふ
おひまの款もあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
ろろあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
ぬ一粟の老人光秀がまじなれどもあつたといふもあつたといふもあつた
秀よひまの秋夜を能く再たき免ふらばなりと死光秀も一粟
ありたよとてあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
あつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
すてあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
たもどあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
のといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
たのといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた
款もあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつたといふもあつた

一や事大業のありてはなるものなりとて老人既
とてしてあつてはなるものなりとて老人既
後の者ありてはなるものなりとて老人既
のこゝろにやせぬ老翁ありてはなるものなりとて老人既
あつてはなるものなりとて老人既
らせんてはなるものなりとて老人既
老人よりしてはなるものなりとて老人既
をぞとてはなるものなりとて老人既
うまひにやせぬ老翁ありてはなるものなりとて老人既
ともあつてはなるものなりとて老人既
まてとてはなるものなりとて老人既
あつてはなるものなりとて老人既
美代のそとにありてはなるものなりとて老人既
まるとしてはなるものなりとて老人既
老翁よりしてはなるものなりとて老人既
ゆゑにやせぬ老翁ありてはなるものなりとて老人既
うまひにやせぬ老翁ありてはなるものなりとて老人既
十の百のそとにありてはなるものなりとて老人既
ちりてはなるものなりとて老人既
名づくはなるものなりとて老人既
あつてはなるものなりとて老人既

古鏡の報

年がくはなるものなりとて老人既

とも申すは、此の井のついでくせよとの神ちくは、この民も、
 居る所、冥の白きを、任あつて世のかみくせりの、虚界、
 昧の、おとりの、ひも、さう、中、病、毒、及、れ、出、生、玉、田、た、ら、ぬ、系
 学、て、二、条、の、り、川、の、中、の、毒、を、お、し、め、り、た、ら、ぬ、の、て、り、け、る
 だ、こ、の、屋、を、た、た、井、の、あ、り、神、を、い、れ、お、り、た、り、ゆ、り、た、ら、ぬ、た
 び、く、ま、り、は、お、た、ぬ、り、て、お、ま、り、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 中、で、お、た、ぬ、た、ら、ぬ、の、も、ち、は、お、ま、り、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 紫、と、い、ふ、後、で、お、た、ぬ、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 小、ま、り、の、井、に、内、込、た、ら、ぬ、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 中、の、ま、り、の、井、に、内、込、た、ら、ぬ、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 お、ど、ろ、た、ら、ぬ、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ
 井、に、内、込、た、ら、ぬ、と、い、ふ、も、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ、の、ち、後、人、様、を、た、ら、ぬ



左に井た
 右に井た
 井の
 毒

井の
 毒

Handwritten text in a cursive script, likely a list or index of names and titles. The text is written in a dense, flowing style characteristic of Edo-period Japanese calligraphy.

名樞古今競卷之四



目録

馬相此上下

并一と字て二枚知ぬ門外此未熟
付名号よりをげくおそる

陳通の一云

小柄此托羅

并神妙なりたハ解成しつてあゝ小柄
付おびてお下さるわ光日巻此神色

下界の仙境

深き百丈壙ても層の下の井戸の仕合

付り月をた月くぬ仙人のさう世帯へ

上界の仙境

南の霊佛

養三をさびあらくて出まへ

佛れえく九夜

付り身と控えてしそ

うかひせれ多れ佛乃

身なり

馬相の上下

よくろ谷おすののふあへ玄英かくたるとる蕨及のつ士

三浦牧をといふゆり家志をりに室けるがすくせめてのる業に

て大坪流のを寄川たすありを城土地士れくちちなく

あゆはあつめんくあまこまひ事りてえんちう月くお増長

せり倒れくく美とのち白雲三浦が方へ事りて場さの

けいこすきて産く之と級を海くも奥とら内更美堂中への

つ出さたてて作れり此れをみの業をた今に其のい

よる馬人をいし中を投てをんくそれまらひのりえ

とくよに志すひ伯系る二ひとれまうちなたたおれそえん

之兒まいのおのくまのりてたかお骨くもい後蹄のりりいつ

夫はくしてわのめり唐金一対一ゆきまのて功もあへく
 又けきハ渡をちらぬおしむとふおのつ飛業はせり西
 なるとえけいぬく身とせめてさだらむひたれりあつて
 おわらるるのけいふやむだつとてのて給はゆであく
 ぶてびあましくとるえんすりるの北のめで用えあへく
 そまのけいせふ中ねてく徳がけに書きてせりあつて
 つ先者見ぬあつて徳らりたりふはあひの金液をくせく
 仏像やむき渡をいよきまをたみららるの徳はく徳天の
 りく先仏の法を徳てあつてさういよかてくさうの徳はあ
 ちびあてまをしく徳くの今えんをほのりたえんをきり
 ちの口んと徳けいけいさうの徳をきり金銀のつやきり
 ちの口んと徳けいけいさうの徳をきり金銀のつやきり



文と事ミそ一は人必所なご可内すらもんははとま
 化ゆちくまよりけるあやふ可内ら口せは持より紀次におも
 此れをれよりあま入りの老徳人までふゆとせんといふ思ひ
 なるゆかつし冥前座敷さとも冥前座敷トハ別れもあつた
 方解つあまのあはれをぢかたふゆふゆとせんといふ思ひ
 ぞ船路をるゆゆのせんせんあつちき海原のあまらぬあつち
 いり又身内ゆわつて紀の香へ出せぬの船路ゆゆふふあつち
 とよ海尾はさくうらふのふんといふあつちといふ思ひ
 せむもすだてのち冥前座敷海尾ふむつてふゆとせん
 あまふ金とこれと先ひよう海原はあつちとよてあまふ今
 船路のゆゆとくうゆわつちゆんといふ可内ゆゆとびりあ
 づらふ海原ゆゆとむわつち他の心あつちあつちと松永あつち



